

## *The House of the Seven Gables* 論 —— 明るい結末が意味するもの

藤 吉 清次郎

ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804–1864) の第二の長編 *The House of the Seven Gables* (1851) (以下『七破風』と略す) はホーソーンの文学世界では珍しく、エデンのイメージすら喚起させる明るい結末を持つ作品である。7代にわたるピンチョン (Pyncheon) 家とモール (Maule) 家の対立を扱ったこの作品では、7つの大罪を象徴すると思われる古い七破風の屋敷を舞台に、さまざまな欲望にまつわる罪と呪いのドラマがゴシック風に展開していくのであるが、作品の終わりのほうで、ジャフレー・ピンチョン判事 (Jaffrey Pyncheon) の死を契機に、物語は急転し、最後に両家の末裔であるフィービー・ピンチョン (Phoebe Pyncheon) とホールグレイヴ・モール (Holgrave Maule) がやや性急な感を残しながら結ばれる、という明るい結末が用意されている。もう少し付け加えれば、この結末において、この若い男女は、判事の従兄弟であるヘプジバー・ピンチョン (Hepzibah Pyncheon) とクリフォード・ピンチョン (Clifford Pyncheon) とともに、ピンチョン判事の莫大な遺産を相続し、呪われた屋敷を離れ、判事が所有していた田舎屋敷へ移り住む。この奇妙な結末については、これまでさまざまに解釈されてきたが、次にその主なものを挙げてみると、①市場を意識したホーソーンが、当時圧倒的な人気を博していた家庭小説に見られるようなハッピー・エンディングを望む当時の一般読者の嗜好に不本意ながら迎合したものとするもの (Gilmore)、②作品の序文の「不正な手段で手にいれた財産 (土地) の継承は子孫に災厄を及ぼす」(2)<sup>1</sup>と

<sup>1</sup> テキストには *The House of the Seven Gables* (Columbus, Ohio: Ohio State UP, 1965), Vol. II of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* XXIII を使用した。頁数は引用文に続けて括弧に入れて示す。引用に際しては文脈上日本語訳を使用した箇所もある。

の記述から、莫大な遺産の継承という結末にホーソーンのアイロニーが見られるとするもの (Von Abel)、③明るい結末はホールグレイヴの肉體的成長という成り行きからすれば順当なものであるとするもの (Martin, Levy) である。

私は基本的には③の立場に立つものであるが、Terence Martin にしろ Alfred J. Levy にしろ、ホールグレイヴの肉體的な変化のプロセスを十分には説明していないように思われる。具体的には、例えば、どのようにしてこの若者がピンチョン一族に対する憎しみの気持を軟化させ、その結果、何故財産や家族をもつことに否定的であった彼がその見解を撤回し、フィービーとの結婚と、彼女に分与されたピンチョン判事の遺産の所有を決意したかが、今ひとつ明らかになっていないように思われる。そこで、本論では、まずホールグレイヴの人物造型に検討を加えながら、それらの問題を論述したい。その際、これまであまり検討されてこなかった、劇中劇であるホールグレイヴ創作の短編「アリス・ピンチョン」に焦点を当てながら、そこに暗示されている19世紀のアメリカの社会状況を検証し、この短編の孕む意味、そしてこの短編とホールグレイヴの肉體的な変化の関係を論究する。次に、19世紀前半のアメリカ社会におけるフィービーの存在意義を考察し、その上で彼女とホールグレイヴの結びつきの意味を検討する。最後に、ホーソーンがその明るい結末に込めた意味をより明確にし、筆者なりの解釈を提出したい。

\*

\*

まず、ピンチョン家とモール家の対立の原因を簡単に確認しておきたい。事の発端は物語現在から160年前マシュー・モール (Matthew Maule) の土地に目をつけた初代ピンチョン大佐 (Colonel Pyncheon) ——ピューリタン軍人であり、非情な判事でもある——が魔女裁判を利用してモールを魔法使いだとして処刑し、彼の土地を奪い取り、そこに「七破風の家」を建ててしまったことにある。処刑に際し、マシュー・モールはピンチョン大佐に向かって、“**God will give him blood to drink!**” (8) という言葉を投げかけるが、その予言のとおり、ピンチョン大佐は家の落成式の日血を吐いて横死を遂げる。その後のピンチョン家には様々な不幸が襲い、着実に「モールの呪い」が子孫を蝕んでゆく。

物語の現在、モールの末裔である若者ホールグレイヴはこのピンチョン家の「呪われた古屋敷」に、素性を隠し下宿している。それは、ピンチョン一族を憎み、その物欲を軽蔑する彼が、屋敷をひとつの“**theatre**” (217) と見なし、屋敷の住人たち——ヘプジバー、クリフォード——の“**misfortunes**” (217) を楽しむためである。田舎から出てきたばかりのピンチョン一族の娘フィービー

も気がついていっているように、彼の住人に対する興味は“human affection” (178) からくるものではない。彼は、自らを住人の輪の外にいる、「きわめて冷静な観察者」(“too calm and cool an observer” 177) として位置づけている。

その彼の格好の餌食となるのが、クリフォードである。従兄弟のジャフレ・ピンチョン——物語現在、ピンチョン家の当主であり、初代ピンチョン大佐の生き写し——によって叔父殺しの犯人に仕立て上げられ、30年間もの牢獄生活を送った後、屋敷にもどってきた言わば廃人同然のこの人物の心の内奥にホールグレイヴは容赦のない観察のまなざしを向けるのである。これはまさしくホーソーン作品中、芸術家タイプ、あるいは科学者タイプの男性にしばしば見られるのと同様な罪——人の心の神聖な領域を侵犯する「許されざる罪」(the Unpardonable Sin)——なのであるが、ホールグレイヴはこのような恐ろしい行為も、自らの高貴な精神が裏付けにあるものとして正当化しようとしている。「小さい時分から一人で生きてきた」ホールグレイヴは家庭の温かみもしがらみも知らずに育ち (176)、そのために感情に流されることのない確固とした考えを持った「観察者」としての自分に価値を見出すようになったのであろう。語り手がこの若者の特徴を指摘する際に用いる、「並々ならぬ落ち着き」(“a more than common poise in the young man” 177) や「大いなる自信」(“so much faith” 181) といった言葉の背景には、感情に流されることを拒否して育った彼の頑な一面があると考えられる。

ホールグレイヴの人物造型において重要なもうひとつの側面は、彼が19世紀中葉のアメリカの社会を生きる22歳の若者として描かれていることである。彼の特徴を端的に言えば、流動性と革新性であろう。彼の流動性は、物語現在においてきわめて現代的なさまざまな職業（小学校の教師、商店の売り子、化粧品行の商人、催眠術の公開講演者、田舎新聞の政治欄の編集者、そして、物語現在では銀板写真家）を転々としているところに見られる。鉄道の到来が象徴するように、<sup>2</sup> 農本主義から産業主義への動きがアメリカ社会に起こり、市場経済が大きく躍進した結果、安定した伝統的な社会秩序が瓦解しつつあった当時のアメリカをそのまま映し出しているような職歴である。安定した職業のみならず、定住もよしとしないホールグレイヴは言わば、その流動化した社会を浮遊する根無し草といった存在である。この意味で、彼は新たな時代の文化・社会の産物としても位置づけられていることがわかる。

<sup>2</sup> Leo Marx は *The Machine in the Garden* の中で、19世紀アメリカにおける、鉄道が象徴する産業主義の台頭とアメリカ人の文学的な想像力の結びつきを刺激的に論じている。

また、彼の革新性については、次のホールグレイヴの言葉がその特質を如実に示している。

“Shall we never, never get rid of the past!... It lies upon the Present like a giant’s dead body! In fact, the case is just as if a young giant were compelled to waste all his strength in carrying about the corpse of the old giant, his grandfather, who died a long while ago, and only needs to be decently buried. Just think, a moment; and it will startle you to see what slaves you are to by-gone times — to Death, if we give the matter the right word!” (182—83)

「過去」が死のごとく「現在」に重くのしかかっているがゆえに、人は「奴隷」のように身動きがとれなくなっていると、この若者は主張している。この後、彼は一代限りで家を壊すばかりか、公共の建物である、市役所、議事堂、教会なども破壊すべきだと述べる。さらに、彼は家族制度にも言及し、フィービーに向かって、次のように述べる。“To plant a family! This idea is at the bottom of most of the wrong and mischief which men do. The truth is, that, once in every half—century, at longest, a family should be merged into the great, obscure mass of humanity, and forget all about its ancestors.” (185)

この時、ホールグレイヴは家制度の弊害の証拠として、子孫に財産（屋敷）を残そうとして、ピンチョン家の祖先が犯した悪事と、そのために子孫が被った“calamity” (185) の事例を取り上げる。ホールグレイヴにとっては、災いの源である家制度は廃止すべき悪しき伝統なのである。彼の一連の革新的な意見を聞いた時、「秩序を愛する性格」(“order-loving character” 305) の持ち主であるフィービーは、そのあまりの過激さにめまいさえ覚えるのであった。フーリエ主義者たちの共同体で数ヶ月過ごしたこともあるとされるこの若者の意見には19世紀前半のアメリカで起こった、様々な社会改革運動の影響が窺い知れる。この革新性と、過去の重みへの嫌悪の観点から見れば、我々はこの若者の人物造型に、ホーソンが時に反発を覚えていたはずのエマソン(Ralph Waldo Emerson, 1803—1882)の影(特に、彼の有名な演説“The American Scholar” (1837))を見ることができのかもしれない。というのも、語り手はホールグレイヴの中にアメリカの次世代を担うにたる潜在的な資質を認めつつも、彼の社会改革への理想が「ある種のさらさやキャラコやギンガム」のように、すぐに「冴えないもの」に変質してしまうことの可能性をも示唆しているからである(177)。

以上、変化をこうむる前のホールグレイヴの人物造型を見てきた。社会改革や家族制度について理想主義的な考えを展開するこの若者の内面に、自らが物欲などのいかなる欲望からも解放された「高潔な」人間——つまり、罪から解放された存在——であるとの思い込みがある点に留意しておきたい。

\*

\*

以上のように「冷静な観察者」を自負していたホールグレイヴであったが、フィービーを目の前にして、はじめて誘惑に心乱される場面がある。それは彼が自ら書き上げたばかりで、雑誌に寄稿予定であった短編小説「アリス・ピンチョン」をフィービーに読み聞かせている最中のことであった。遺伝体質的に催眠術師としての能力を持っていた彼は不意に彼女の魂を手中に収めたいとの誘惑に襲われるのである。ここで、誘惑の場面を検証する前に、手短に彼の創作の短編「アリス・ピンチョン」の内容を確認しておきたい。というのはこの短編はホールグレイヴの内面心理を知る上で重要な手がかりを有しているからである。

この短編はホールグレイヴによれば、ピンチョン家にまつわる史実を基にして書き上げられたものである。その昔ジャーヴェイズ・ピンチョン（ピンチョン家の3代目）は初代ピンチョン大佐が手に入れたとされる、メイン州にある広大な土地の権利証書（アメリカ先住民の土地権利証書）——この証書はピンチョン家の人々が代々、探し求めているものであり、この一家の強欲を表す一つの象徴となっている——の所在の探索を大工マシュー・モール（モール家の3代目）に依頼する。特殊な催眠術の能力をもつマシューは失われた証書を見つけるのに、霊媒を使った透視を行うにあたって、ジャーヴェイズの娘であるアリスの、「純真で処女の知性をもつ、澄んだ、透明な霊媒」（“the clear, crystal medium of a pure and virgin intelligence” 200）を使う必要があると、ジャーヴェイズに申し出る。これはもちろん、貴族的であることを鼻にかける傲慢なジャーヴェイズ親子に対して抑えがたい階級的な反感を抱く平民マシューの策略でもあった。ためらいはしたものの、どうしても土地の権利証書がほしい強欲なこの父親はついにマシューの提案を受け入れる。マシューはアリスに催眠術をかけて、昏睡状態にして、霊界の人々と交信することに一応は成功する。しかし、例の証書の行方はわからないままであった。アリスは催眠状態から目覚めはするものの、マシューの術はその後も影響を及ぼし続け彼女は心身ともに、彼の奴隷となってしまい、屈辱のなかで死んでしまう。

こうしたモール家とピンチョン家との間で起こった悲劇の物語を読み聞かせる過程で、ホールグレイヴが「催眠術を施している大工の姿をありありと

フィービーにわからせようとして、神秘的な身振りをした結果」(211)、図らずも彼女は物語の中のアリスさながら催眠状態に陥るのである。“It was evident, that, with but one wave of his hand and a corresponding effort of his will, he could complete his mastery over Phoebe’s yet free and virgin spirit; he could establish an influence over this good, pure, and simple child, as dangerous, and perhaps as disastrous, as that which the carpenter of his legend had acquired and exercised over the ill-fated Alice.” (211-12) ホールグレイヴはこの瞬間、ピンチョン一族の娘フィービーの「自由で純潔な精神」の支配権を握る。この女性の魂を手中に収めたいという激しい誘惑に駆られ、思わず自慢の「冷静さ」を失ってしまう。それは先祖の復讐を果たす絶好のチャンスでもあった。しかし、彼は祖先のマシューとは異なり、その誘惑に打ち克ち、フィービーを催眠状態から解き放つ。こうした行動を取ったホールグレイヴについて、語り手は次のように述べる。“Let us, therefore——whatever his defects of nature and education, and in spite of his scorn for creeds and institutions——concede to the Daguerreotypist *the rare and high quality of reverence for another’s individuality*. Let us allow *integrity, also, forever after to be confided in*; since he forbade himself to twine that one link more, which might have rendered his spell over Phoebe indissoluble.”(212) (Italics mine) ここで語り手はホールグレイヴが欲望を抑制できたことによって、彼の「他人の個性を尊重するという稀有な気高い性質」と、「以後永遠に信頼するに足る高潔な心」とを認める発言をしている。この語り手の唐突な意見をわれわれはどのように解釈すればよいのであろうか。

確かに、ホールグレイヴが誘惑の場面において自らの欲望を抑え、ピンチョン一族のひとりであるフィービーの魂を支配することを断念したという事実が彼の内的な変化を確認できはする。実際、この直後、彼の心には劇的な変化が生じ、「人間的な感情」を取り戻し、観察の対象でしかなかったクリフォードに対し憐憫の情さえ抱くようになる。しかし、私見では、先ほどの語り手の説明では、いかにして若者がピンチョン一族に対する憎しみを克服するきっかけを得たか、が不明である。もちろん、Joel Pfisterも指摘するように、ホールグレイヴがフィービーの精神の支配を取りやめた要因のひとつとして、例の物語を読み終えた時点で、若者がこの女性に恋していることに気がついたということが挙げられるだろう (Pfister 156)。私もまた、フィービーに対する愛が若者のピンチョン一族に対する憎しみを克服する際に大きな役割を果たしていると考える者であるが、しかしホールグレイヴの内的な変化は、先ほどの語り

手の説明も考え合わせると、やはりフィービーへの愛によってもたらされたという指摘だけでは十分ではないだろうと思われる。そこで、次に彼の創作短編「アリス・ピンチョン」に焦点を当て、この短編の内包する意味を考察しながら、この問題を解明したい。その際、フィービーの魂を支配することを諦めたホールグレイヴの行為を19世紀前半のアメリカという文脈からも考えてみたい。

\*

\*

短編「アリス・ピンチョン」の時代設定は『七破風』のそれをさらにさかのぼって18世紀中頃であり、そこにおよそ一世紀ほどのずれはあるものの、物語の中で、ジャーヴェイズがアメリカ先住民の土地所有への「欲望」をつのらせ、大事な娘を人身御供として差し出し、一方のマシューは若い娘の魂を支配し、弄びたいという「欲望」を催眠術によって満たそうとするという設定に19世紀前半を特徴づける2つの社会問題への示唆が見て取れる。(この点、ホールグレイヴがこの短編を19世紀中葉に現存し、ホーソンも投稿したことがある *Godey's Lady's Book* や *Graham's Magazine* の雑誌に寄稿しようとしていたという物語設定は注目すべきだろう。) つまりそれは当時、世間を騒がせていたアメリカ先住民の土地問題と、メスメリズムの流行の問題である。

19世紀前半というのは、アメリカ先住民の土地の処遇をめぐり熱い議論が繰り広げられた時代である。アメリカ政府(大統領アンドルー・ジャクソン(Andrew Jackson)<sup>3</sup>)がアメリカ先住民を「保護」という名目でインディアン強制移住法(Removal Act)を可決し、彼らから、住み慣れた豊かな土地を奪い取ったのは1830年であり(Wallace 45)、そののちは作品中に見られるように白人同士の土地争いへと進展していくのである。<sup>4</sup> この点をもう少し補

<sup>3</sup> Howard Zinn はアンドルー・ジャクソンについて、“Jackson was a land speculator, merchant, slave trader, and the most aggressive enemy of the Indians in early American history.”(Zinn 98) と述べ、アメリカの国家的なヒーローとされる人物の裏の顔を暴露している。

<sup>4</sup> 『七破風』の中で、ホーソンはアメリカ先住民の土地問題(政治問題)をあくまで暗示的にしか描いていない。それは『七破風』の序文の中でホーソン自身が述べているように、ホーソン流の「ロマンス」が、事実と照合されることによって“an inflexible and exceedingly dangerous species of criticism”(3)に晒されることを何よりも嫌ったからに他ならない。従って、“Hawthorne himself actively participates in ‘obliterat[ing]’ Native Americans’ ‘place and memory from among men’ by removing them from his literary construction of early ‘American’ history.”(Powell 40) と断定する Powell の意見には疑問を抱かざるを得ない。

足しておけば、Michael Rogin が指摘するように、広大なアメリカ先住民の土地を手に入れた結果、アメリカ社会は大いなる市場経済の発展を遂げるようになったのである (Rogin 80, 85)。

一方のメスメリズムとは、そもそも18世紀にオーストリア生まれのフランツ・アントン・メスメル (Franz Anton Mesmer, 1734-1815) が、身体の持つ動物磁気存在を前提に、特殊な能力を持つ医者が患者に催眠術を施し、病気を特定し、治療することをはじめたものである。これが、アメリカにも伝わり19世紀前半のアメリカでは医療としてばかりでなく、霊媒——通常、霊媒となるのは若い女性である——を通じて死者と交信するというオカルト的な要素を持つに至っていた (Coale 8-12)。当時アメリカでは宗教が弱体化、形骸化していたことも手伝って、メスメリズムを信仰する者は爆発的に増えていたという。実際に信者とまではいかないまでも、ホーソーン自身の妻ソファイア (Sophia) もその持病である頭痛の治療のためにメスメリストと面会をしているが、それに対して、ホーソーンがかなり否定的であったという史実がある (Letters 588)。Samuel Coale も指摘しているように、こうしたメスメリズムの流行の脅威を身を持って経験していたホーソーンが、催眠術をかけられる対象としての哀れなアリス・ピンチョン像を創造する際に、当時の典型的な霊媒としての女性像を念頭においていたことは、まず間違いのないと思われる (Coale 13)。

ホールグレイヴの創作短編「アリス・ピンチョン」におけるアメリカ先住民の土地問題とメスメリズムの問題の絡みつきを鋭く指摘したのは高尾直知である。彼の解釈によると、物欲にまみれたジャーヴェイズは、アメリカ先住民を気遣うふりをしながら、彼らの土地を奪ったアンドルー・ジャクソン大統領であり、マシューは19世紀に大流行していたメスメリズムを悪用して、若い女性の「魂の帝国」を支配しようとするメスメリストたちの代表である (高尾 41-43)。高尾は、アメリカ先住民の土地を狙うアメリカ帝国主義と若い女性の魂を食物にするメスメリズムの間の本質的な類似性を指摘しながら、アリスの魂＝アメリカ先住民の土地と捉え、そこに、主体になることを許されないもの——女性、アメリカ先住民——の悲劇性を読み取る (高尾 42-43)。いずれにせよ、ジャーヴェイズとマシューの欲望が相まって、アリスというひとりの無垢な女性を抹殺してしまうという設定は間違いなく、ホーソーンが、アメリカ先住民追放の、そしてメスメリズムのはびこった現実に対する危惧と批判精神を、劇中劇という形を借りて打ち出したものと解釈できるであろう。二人の男の欲望は19世紀アメリカ社会に蔓延していた、歯止めのきかない「欲望」



のメタファーとして読むこともできるだろう。<sup>5</sup>

以上のような19世紀のアメリカの社会問題が秘められた劇中劇を自ら書き著わし、読み聞かせ、そして欲望の疑似体験までしてしまうホールグレイヴについて注目すべきことは、彼が欲望を抑制することに成功したという事実よりも、彼が欲望を身をもって経験したという事実ではないかと思われる。というのも、彼は「冷静な観察者」を自負してきた銀板写真家であり、財産の所有を潔しとしない社会改革主義者だったからである。19世紀のアメリカ社会を告発する小説としても読める短編「アリス・ピンチョン」において、作家ホールグレイヴはジャーヴェイズの欲望——ピンチョン一族の物欲を表す——とマシューの欲望——モール一族の魂の支配欲を表す——を等しく、高潔な自分とは無縁なものとして批判的に描き出したはずである。皮肉なことに、その彼がフィービーに対し邪悪な欲望を抱くことによって、「墮落した人間」としての自身を認めざるを得なくなったのである。そして同時に、彼は自身も憎むべきピンチョン家の人間と同じく、欲望を持った人間であることを認めざるを得なくなったと言える。こうした認識を持ちえたホールグレイヴは、ピンチョン家とモール家との間で長く続いた不毛な争いを、はじめて自らの問題として受け入れることができたのである。この若者はこの時、観察者から「演技者」へと踏み出したと言える。

ホールグレイヴの人間的な成長については、対ピンチョン一族の問題を指摘するだけでは十分ではないだろう。というのは、前述したように、『七破風』において、この若者がアメリカの次世代を担う人材としても捉えられていると思われるからである。先にふれた、短編「アリス・ピンチョン」に映し出されている19世紀前半のアメリカの社会問題に即して言えば、フィービーの魂を支配したいという欲望を抑えたホールグレイヴのその行為は、メタレヴェルでは、彼がアメリカ帝国主義とメスメリズムを批判し、アメリカ先住民と女性にその主体性を認めたことを暗示するものだと考えられる。先に述べたように、語り手はホールグレイヴのその行為を「他人の個性を尊重する」精神に基づくものと捉えているが、Richard Millington が指摘するように、この精神こそは“the basis for demarcating a legitimate form of democratic authority” となり

<sup>5</sup> Robert Kelly は19世紀前半のアメリカの社会状況について “The volatile and expansive years from 1815 to 1850 were, in short an age of boundless when the ancient limits that had suppressed human aspirations seemed magically disappeared.” (Kelly 143) と述べている。

得るものであり (Millington 140)、<sup>6</sup>『七破風』の明るい結末の可能性を裏付ける要因のひとつになっていると言えるだろう。この意味で、人間的な成長を果たしたホールグレイヴは、「若きアメリカ」の民主主義社会の担い手としても位置づけられているはずである。

\*

\*

以上、彼の自作の短編「アリス・ピンチョン」に映し出された19世紀前半の社会状況を考察しながら、ホールグレイヴの内面心理を考察してきた。次に、元来、家制度そのものに反発してきた彼が結婚を決意するに至ったその源となる、娘フィービーの人物造型を検証し、彼女とホールグレイヴの結びつきを考えてみたい。

先に指摘したように、19世紀前半のアメリカは、産業主義・資本主義化が進展する過程で人々が自らの欲望を膨張させていった時代であるが、フィービーはそうした時代の流れに惑わされることのない人物として描かれている。Richard Brodhead はフィービーについて、“Phoebe brings along with her the virtues and limitations of the New England village.”(Brodhead 75) と述べているが、これは彼女の特性をよく捉えている。貴族的なピンチョン家の末裔でありながら、庶民の母親の資質を引き継ぎ、ニューイングランドの田舎で育ったという彼女は、信仰心篤く、平民的で、質素・堅実な女性である。19世紀の消費社会においても、彼女はニューイングランドで身につけた美德に従い、堅実な生活を送っている。実際、町に買い物に出かけて、「素敵な品物の並んでいる店という店をさがしまわっても」(174)、彼女が買って帰るのは“ribbon”ひとつだけである(174)。また、彼女は自らの手で部屋の模様替えを行い、店でバターを買わずに、家で作っている。多くの評家たちが指摘するように、まさに home を象徴する存在であり、男性に日常世界での幸福をもた

<sup>6</sup> マルチカルチュラルリズムの観点からアメリカ・ルネッサンスの作品解釈を試みる Timothy B. Powell は “I agree with Matthiessen that Hawthorne’s romance reveals the ‘possibilities of democracy’; in my view, however, these ‘possibilities’ include not only a longing for justice and equality but also an implicit desire for a monocultural utopia.”

(Powell 40) と述べ、ホーソーンが考える民主主義があくまで白人のためのものであったと指摘する。確かに、この Powell の指摘は、時代の制約を考慮に入れば、ある意味で当を得たものである。しかし、『七破風』において、アメリカが純粋な白人国家であることをホーソーンが望むあまり、アメリカ先住民の存在を打ち消そうとしているという Powell の解釈 (Powell 42-48) はやはり、妥当性を欠くものと思われる。事実はむしろ逆で、ホーソーンは『七破風』において、アメリカ先住民の存在をないがしろにしたアメリカの帝国主義的な振る舞いこそを秘かに告発しているのである。

らす **fair lady** とも言える彼女であるが、ここで無視することのできないのが、彼女が実務的にもすぐれた「勘」(“**knack**” 78) の持ち主であり、経済的にも自立し得る女性としても描かれている点である。やはり母親から受け継いだとされるその「勘」は、味も大変よく、胃腸薬としての効き目もある一種のビールを醸造し、すばらしいケーキを焼いてヘプジバーの10セントショップの新たな呼び物にするなどという裏方的な仕事にとどまらず、買い物客との生き生きとした可愛らしい会話のやりとりにも活かされて、ヘプジバーの傾きかけた10セントショップを立て直すのに大いに貢献するのである。“**You shall see that I am as nice a little saleswoman, as I am a housewife.**”(78) というフィービーの言葉はそのまま現実のものとなり、ヘプジバーを驚かせる。

こういったささやかではあるけれど、人間社会に根をおろした彼女の実務性は、何もできないことをうぬぼれに摩り替えるようなヘプジバーの貴族意識と対照的に描かれていると同時に、ジャフレー・ピンチョン判事が象徴するような物欲に取り付かれた19世紀的な実務性(資本主義・商業主義)とも対照的に描かれている。具体的には不動産、株取引、投資など、利潤追求だけを目的としたジャフレーの経済行為が、ちょうど彼が叔父の財産をせしめるために、従兄弟のクリフォードを罫にかけたその行為に具現されるように、倫理性・人間性を欠く空疎なものとして否定的に描かれているのに対して、フィービーの地道な労働は生きていくために必要であると同時に好ましいものとして捉えられている。それは語り手が言うように、彼女が“**with a self-respecting purpose to confer as much benefit as she could anywise receive**”(74) 商売を行うからである。Millington が指摘するように、フィービーにとって、セントショップは“**a place of fair exchange**”なのである(Millington 115)。歴史家のChristopher Clark が指摘するように、フィービーのような営みは、人と人のつながりを重んじる田舎の地域社会で実践されていた道徳・倫理に基づく経済行為であり、アンテベラム期のアメリカにおいて、非人間化して行く資本主義機構の中で急速に失われて行ったものである(Clark 195-207)。ある意味で、資本主義市場経済の台頭に対して危機感を抱いたホーソーンが、フィービーという人物を通じて、その市場経済社会における一つの理想的な在り方を提示しているとも思われる。

ホールグレイヴはと言えば、彼は銀板写真家として、あるいは小説家として、あるいはメスメリストとして、一見活動的に行動していたのであるが、その実、それらはいずれも「視る」「観察する」ことに重きを置いた脱社会的な行為であったため、人間社会のなかで生きていくすべ、あるいは勘といったようなも

のは身に付けていなかったと考えられる。「七破風の屋敷」で、敵対する相手であるジャフレー・ピンチョン判事の突然の死——罪とその報いの現実——を目の当たりにしたことで、あれほどの自信家であった若者が今や、誘惑の場面の時と同じく、「冷静さ」を失い、言いようのない不安を覚え——Nina Baymが言うように、このジャフレーの死を目撃した後、ホールグレイヴは死の重みをはじめて実感し、“His new vision sees the whole world under the shadow of the guilt he feels.” (Baym 168) ——、そのためにフィービーに助けを求めるのである。そして彼女の愛を確認した彼は、フィービーに対して次のように語る。

“The world owes all its onward impulse to men ill at ease. The happy man inevitably confines himself within ancient limits. I have a presentiment, that, hereafter, it will be my lot to set out trees, to make fences—perhaps, even, in due time, to build a house for another generation—in a word, to conform myself to laws, and the peaceful practice of society. Your *poise* will be more powerful than any *oscillating* tendency of mine.”(306—307) (Italics mine)

この激変した若者の発言はフィービーを大いに驚かせるわけであるが、彼女の後ろ盾を得たホールグレイヴは、かつて社会改革主義者であった自分が保守へと変節し、人間社会のなかで安定した人生をおくる選択を行なったことを自覚している。彼はどんな状況にも対応できる強靱な「平衡感覚」の持ち主であるフィービーにプロポーズするという「行為」によって、19世紀前半の流動的なアメリカ社会の中で「揺れ動く」自分を律し、健全に生きて行くための選択を直観的に行なったと言える。それは言い換えれば、潔癖さを誇っていた自身の中に内在する「欲望」を認めた上で、財産や家族を保有するという意味で、彼にとっては極めて謙虚な選択であったとも考えられる。若者にとって、フィービーとの結婚に伴うピンチョン家の財産の継承は、幸運の賜物というよりは、ピンチョン家の負の遺産（歴史）の受容を意味するものであり、ここに、われわれ読者は Rudolph Von Abele の言うようなホーソーンの「皮肉」(Von Abele 396) ではなく、自らの運命を受け入れた若者に対する作者の期待を読みとるべきであろう。

\*

\*

以上、私はホールグレイヴの人間的な成長に伴う考え方の変化と、メスメリズムと土地争いの横行した19世紀前半の時代背景、そして保守的であるけれ

ども、新しい資本主義の時代にも健全に対応することのできる強靱なバランス感覚を持ったフィービーの人格を考察することによって、作品の明るい結末(相反する両家の末裔の結婚)が、多くの批評家たちの言うような、皮肉でもなく、また19世紀の時代思潮とも言えるエマソンの楽天主義<sup>7</sup>に迎合したものでもなく、極めて妥当なものであることを論証した。

ホールグレイヴの人間的な成長の鍵は、多くの批評家たちが指摘するような欲望の抑制にあるのではなくむしろ、欲望の認識にあったと考えるべきであり、彼はその認識をもってはじめて、物語(短編「アリス・ピンチョン」)や、劇場(「七破風の屋敷」)の作者あるいは観察者という「潔癖な」立場から降りて、家庭をもち、財産を相続し、所有するという現実の人間社会への参入を果たすことができたのである。

本来「他人の個性を尊重する」民主的な精神を持ち合わせながら、欲望の認識という作業を経たホールグレイヴ(観念)とフィービー(生きる力(勘))との結びつきは、憎しみあうピンチョン家とモール家の和解を越えて、産業主義の台頭によって混乱期を迎えていた当時のアメリカ社会全般の再生への可能性を示していると言える。

### Works Cited

- Baym, Nina. *The Shape of Hawthorne's Career*. Ithaca and London: Cornell University Press, 1976.
- Brodhead, Richard. *Hawthorne, Melville, and the Novel*. Chicago: University of Chicago Press, 1976.
- Clark, Christopher. *Roots of Rural Capitalism: Western Massachusetts, 1780-1860*. Ithaca and London: Cornell University Press, 1990.
- Coale, Samuel C. *Mesmerism and Hawthorne: Mediums of American Romance*. Tuscaloosa and London: Univ. of Alabama Press, 1998.
- Gilmore, Michael T. "The Artist and the Marketplace in *The House of the Seven Gables*." *ELH* 48(1981), 172-89.
- Hawthorne, Nathaniel. *The House of the Seven Gables*. Vol. II of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat et al. 24 vols. Columbus: Ohio State UP, 1962-97.

<sup>7</sup> 19世紀前半・中葉のアメリカの楽観的な時代思潮については、R.W.B. Lewis の *The American Adam* に詳しい。特に、第一章 "The Danger of Innocence" (pp.13-73)。

- \_\_\_\_\_ . *The Letters 1813 – 1843*. Vol. XV of *C. E.*
- Kelly, Robert. *The Cultural Pattern in American Politics: The First Century*. New York: University Press of America, 1979.
- Levy, Alfred J. “*The House of the Seven Gables: The Religion of Love.*” *Nineteenth-Century Fiction*, XVI (December, 1961), 189–203.
- Lewis, R.W.B. *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century*. Chicago: The University of Chicago Press, 1955.
- Martin, Terence. *Nathaniel Hawthorne*. (rev. ed.) Boston: Twayne, 1983.
- Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America*. New York: Oxford University Press, 1964.
- Millington, Richard H. *Practicing Romance*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 1992.
- Pfister, Joel. *The Production of Personal Life: Class, Gender, and the Psychological in Hawthorne’s Fiction*. Stanford, California: Stanford University Press, 1991.
- Powell, Timothy B. *Ruthless Democracy: A Multicultural Interpretation of the American Renaissance*. NJ: Princeton University Press, 2000.
- Rogin, Michael Paul. *Fathers & Children: Andrew Jackson and the Subjugation of the American Indian*. 1975. New Brunswick, NJ: Transactions, 1991.
- Von Abele, Rudolph. “Holgrave’s Curious Conversion.” In *The House of the Seven Gables*, edited by Seymour L. Gross, 394–404. Norton Critical Edition. New York: W.W. Norton, 1967.
- Wallace, Anthony F.C. *The Long, Bitter Trail: Andrew Jackson and the Indians*. New York: Hill and Wang, 1993.
- Zinn, Howard. *A People’s History of the United States: American Beginnings to Reconstruction*. 1980. New York: W.W. Norton & Company, 2003.
- 高尾直知 「動物磁気、強制移住、銀板写真——『七破風の家』と『ピエール』」、『フォーラム』第六号、2000年、35～54頁。

2004. 1. 31受理

**Abstract**

*The House of the Seven Gables:*  
The Meaning of Its Happy Ending

---

Seijiro FUJIYOSHI

---

This article demonstrates that the happy ending of *The House of the Seven Gables* is appropriate, not ironical, nor catering to the readers' optimistic tastes of the times, by investigating the next three points: (1) the change of Holgrave's way of thinking which goes with his spiritual growth (2) the social background of nineteenth-century America which was infested with mesmerism and also with land struggle, and (3) the characterization of Phoebe as someone with strong 'poise' with which she can lead a wholesome life even in the age of the coming industrial capitalism. The key to Holgrave's spiritual growth lies in the acceptance of his own desire rather than in the control of it. This was because he had a prejudice that he was free from any desire. That acceptance makes him give up his position as a 'cold observer' and get into the 'magnetic chain of humanity' by owning a family and estate. The marriage between Holgrave with a 'democratic spirit,' who has accepted his own desire and his sinfulness, and Phoebe with a 'knack' for living, indicates the possibility of renewal for American society, which was then thrown into confusion with the rapid expansion of industrial capitalism. Their union can be seen in larger terms as more than the reconciliation of the two families who hate each other.